

▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて（15）

先人たちからの贈り物

楠 瑞希子



お茶の水女子大学附属図書館のWEBサイト
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ
クション（略称 TeaPot）」にてバックナン
バーインターネット公開中。
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

▼ネット時代とイギリスの保育史研究

私は、イギリスにおける保育の歴史を研究しています。長く続ければよいというものではないので誇れる数字ではありませんが、書いたものが初めて活字になった時から数えて三十五年が過ぎました。この間の研究環境の変貌は著しく、とりわけインターネットの本格的な普及後の変化にはめまいを覚えるほどです。なにしろ、政策動向を知るためについ先ごろまで多大な費用と時間をかけて取り寄せていた政府刊行物が、イギリスで刊行されるのと同時に全て無償で入手できるようになつたのですから、その恩恵は計りません。

『幼児の教育』がお茶の水女子大学のウェブサイトで公開されているという話は、一年ほど前でしたか、「幼児教育史学会」に集う若い会員から聞きました。存在は学生時代から知っていたのですが、浅学な私の眼にはイギリスの保育史研究に必要な資料とは映らず、最

初に手にしたのは修士課程を終えて何年もたつてからのことでした。偉大な保育雑誌の「小さき」に驚きを覚えたのを、いまだ鮮明に思い出します。

先人たちがイギリスの保育について何を伝えてきたのかが知りたくて、幾度かサイトを訪れました。その都度、私の研究対象を同時代人の眼でとらえていた先人たちの貴重な証言の数々に出あいました。成果の一端を三つほど紹介しましょう。引用文中の字体は改めています。

(The Infant School)に入り、中等以上の社会に属する子供は高等女学校に行く前に幼稚園 (The Kindergarten) に行く

「二種の保母養成所があります。^{すなわち}即子供を保育する技術のみに長じて、保母の下働きとなる者を養成する」と、技術のみならず、保育の原理を了解する保母を養成する所との二つあります……」

これは、日本における近代女子教育の開拓者の一人である、安井てつ(一八七〇～一九四五)が、創刊間もない一九〇一年の『婦人と子ども』第一巻第三号と第四号に寄せた「英國幼稚園の状況」からの引用です。安井

その一は、異国における保育制度の在り方の特質を、先人たちが実に的確にとらえていたことです。しかもそれは、今日のイギリスの保育にもかなり当てはまるようと思われるのです。

「さて英國では幼児を保育する場所を二つに分けます。……下等社会の子供は小学校に行く前に幼稚学校

は一八九六年に文部省留学生として渡英し、オックスフォード、ケンブリッジ両大学で教育学や心理学を学んで一九〇〇年に帰国したところでした。ここで安井は、イギリスの幼稚園が、日本のように小学校に接続しておらず中等学校（当時の日本の中学校・高等女学校）の予備門となっていること、小学校に接続しているの

は幼稚学校という別種の機関であることを伝えていました。そして、前者は中流以上の階層の子どもだけが通う学校系統で、「幼稚学校・小学校」という一般庶民層の学校系統とは交わらないこと、つまり、イギリスには社会階層によつて分断された二つの学校系統が存在してゐて、それが幼児期から保育者養成にまで及んでいることを報告しています。その上で、幼稚園、幼稚学校のどちらにおいても保育内容は「わが国のに比べますと知育に偏しているようにみえます」と評して、私は思わず「そうそう、その通り」と相槌を打つたことでした。

白根孝之の「英國文部省の幼児保育指針」（第三十五巻第五号　一九三五年発行）における次の指摘もまた、イギリスの保育の特質を過不足なく伝えていて、私をうならせました。一九二一九（昭和四）年発行のHandbook of Suggestions for Teachersの紹介に白根が添えた解説からの要約引用です。

一、「英國の保育界——のみならず教育の全系統には二つの階級的な流れ」がある。

二、就学年齢が五歳と定められているので、日本の制度では「保育」と呼ばれるべき時期を含む小学校の低学年部までを紹介しなくてはならない。

三、イギリスには、日本の学校令のような強制力ある統一的な規定がなく、各学校に最大限の自由を認めているので、この指針も目標や大綱を示したものにすぎず、「実情を知ろうとなれば、個々の学校についてその行つていているところを見るほかない」。

成果のその二は、邦訳資料の発見です。マーガレット・マクミラン（一八六〇—一九三二）の著作物の邦訳（「保育学校と母性」第二十六巻第九号　一九二六年発行）を目にした時には、自分の資料探索の甘さをいたく反省しました。マーガレットは、姉レイチエル（一八五八—一九一七）と共に野外保育学校Open-Air Nursery Schoolを開き、貧民幼児の保健と親教育に重

点を置いた保育学校の実践モデルを作り上げた社会事業家で、日本でも早くからその名を知られた人物でした。おびただしい数の雑誌記事と相当数の著書を残しているのですが、その仕事に関する日本語文献はまだまだ乏しく、今後の資料の発掘や蓄積が待たれます。また、「英國保育学校令並に訓令」（第二十三卷第四、五号）は、ファイルを開いてみると一九一九年（大正八年）年発布の「保育学校規程」の全訳でした。

第三の成果は、第二点とかかわるのですが、日本の保育関係者が保育学校に寄せた関心の大きさを実感したことです。おそらくは、一九二六年（大正十五年）年の「幼稚園令」制定前後の論議の中で、保育学校に適当な改革モデルを見出したからなのでしょう。倉橋惣三が第一十三卷第一号（一九二三年発行）に「英國の保育学校」を寄せていましたし、堀七蔵は「私の視察した歐米の幼稚園教育（五）、（六）、（七）」（第二十七卷第九、十、十一号　一九二七年発行）で保育学校をていねい

に紹介しています。その十年後、白根孝之は「イギリス保育發達史（一）（二）（三）」（第三十七卷第一、二、三号　一九三七年発行）を、一般庶民層の幼児の就学制度が「當局の進歩的態度と、教育者の努力とによって、次第に完備して來た。その最も大きな結実は保育学校である」と結んでいます。

▼二十一世紀の保育学校

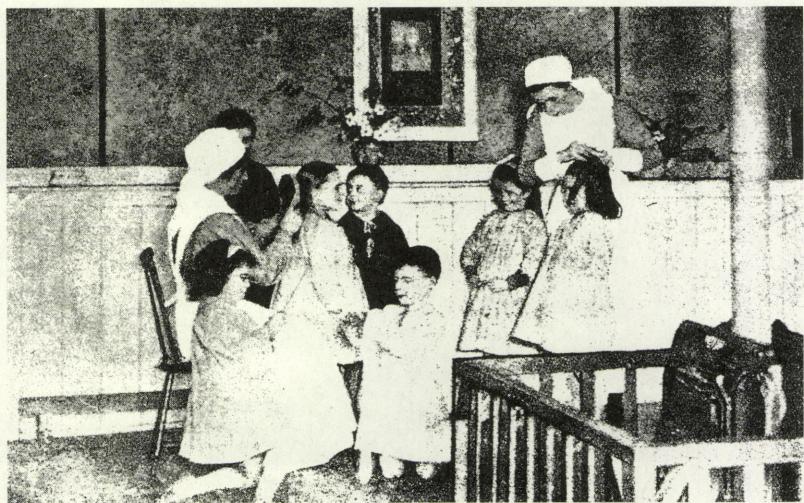
そこでこのリレー原稿を、保育学校の近況報告で締めくくることにします。

イギリスの保育学校は「一九一八年教育法」によつて公費助成の道が開かれ、一九二〇、三〇年代を通じて活発な設置運動が展開され、都市を中心に一定の普及をみました。しかし、第二次大戦後は設置抑制策が続いて、就学前教育全体が停滞してしまいます。それでも保育学校は、望ましい保育の在り方を体現する施設であり、指標であり続けました。

マーガレットが姉の没後にレイチエル・マクミランと名を改めた保育学校も、その厳しい時代をぐぐり抜け、いまも当時と同じ場所（ロンドン東南部デドフォード）で現代の保育課題に挑戦し続けています。

かつて、その特徴をなしていた沐浴や検診などは、もはや行われていませんけれども、屋外での活動を重視する保育方針は、いまも変わっていません。園舎は、宇佐美ケイの訪問記（第三十一巻第四号 一九三一年発行）には「木造平屋建の粗末な建物」とありますが、現在は全てレンガ造りで、保育室の一方は園庭に向けて全面が開くテラス窓になっています。

写真（P. 53）は、二〇〇八（平成二十）年三月の訪問時に撮影した園庭の風景です。手前の円柱はマーガレットの業績をたたえて建立された記念碑です。奥に見える大きなビルの位置には、しばらく前までマーガレットの設立した保育者養成校レイチエル・マクミラン・カレッジ（一九三〇～七七、最終理事会開催年をもつて



▲沐浴後、髪を整える子どもたち

『幼児の教育』第27巻第11号1927年発行 マクミラン女史の保育学校記念室口絵より



『幼児の教育』のネット公開によつて、私たちは、先人たちがかつて伝えた外国の保育の様子を容易に知ることができるようにになりました。その記事の数々は、同時代人のまなざしをもつて過去を見るなどを可能にする、先人たちからの素晴らしい贈り物ではないでしょうか。

(聖徳大学大学院教職研究科教授)

閉校とみなす)の建物がありました。先人たちは、そこに学ぶ女子学生が日々実習生として通つてきて、かがいがいしく幼児の世話をを行う姿を報告しています。

マクミラン保育学校は、現労働党政権（一九九七）の方針に従つてチルドレンズ・センター化が図られ、三・四歳児対象の就学前教育部門に加えて、〇・一・二歳を預かる乳幼児保育部門、早朝・放課後保育部門、親支援部門を設置しています。そのほとんどは、もともとマクミランの時代に実施していたことでした。